

平林たい子全集

1

潮出版社

平林たい子全集

1

平林たい子全集 1

昭和54年4月10日 印刷

昭和54年4月25日 発行

著者・平 林 た い 子

装 幀・伊 藤 憲 治

発行者・富 岡 勇 吉

発行所・ 潮 出 版 社

東京都千代田区飯田橋3-1-3

電話 東京(03)230-0741(販売部)

230-0781(編集部)

郵便番号 102

振替 東京5-61090

© 1979 Shinko Teshiropi Printed in Japan

乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします

目次

或る夜·····	9
桐の花·····	10
気持のよい学校·····	11
冷たい笑·····	13
スパイ事件·····	15
愚なる女の日記·····	20
古戸棚·····	27
刺青事件の真相·····	32
嘲る·····	40
足·····	60

投げすてよ！……………66

蛹と一緒に……………79

巡査と春……………87

西向の監房……………91

施療室にて……………93

目……………106

堪えがたい幽霊……………109

感謝週間……………112

夜風……………124

私の友人……………140

出札口

.....

142

荷車

.....

146

生活

.....

165

新婚

.....

172

足音

.....

176

母の誇

.....

181

殴る

.....

184

非幹部派の日記

.....

198

労働

.....

215

痣のある紙幣

.....

229

労働者の妻	241
壁新聞	248
森の中	253
M病院の幽霊	268
醤油工場	273
朝鮮人	276
ルーフガーデンの上の月	280
敷設列車	282
石鹼工場の同志	301
袋を貼る女房	310

糸価補償法	312
女学生	324
笑っている老闘士	327
耕地	333
高塀の中	349
活花と虱	353
家庭生活の喜び	359
女店員の不平	363
プロレタリアの星	373
プロレタリアの女	395
解説・瀬沼茂樹	411

平林たい子全集

1

或る夜

ほの暗いランプの光に照らされた、寝ている庵主の横顔から首へかけての光のない膚の色は、朽ちた落葉を見るような、汚い連想を松貞の心に呼び起した、折々紙を破る様な弾力のない咳をするとその筋張った首の筋肉はブル……ブル……と波打った。そのたびに松貞は顔をそむけずにはいられなかった、「もう長い事はない——」四五日前から松貞は、日に幾度もそんな事を考えた。そのたびに庵主の死後の尼寺や、自分の運命について考えたが、そこに何となしに明るいものが待っている様に思われた。いよいよ解放される——彼女は近頃、夕暮などに冷い板の間に坐って読経しながらも頭のどこかにはいつもその考えが動いていた。始めて弟子入をした当時、彼女はよく何かしら高い感激に打たれて目を潤ませながら、仏像の光っている暗い仏壇の前で厚い祈を捧げたものだった。しかし、彼女の心に目覚めかけた何物かが、彼女を人間の生活の方へ誘って行った。彼女はそこで「人間としての生活」と「悩み」とを知った……又力任せに弦を擦っているらしいけたましいヴァイオリンの音が、毎夜弾く隣のKの家から聞えて来た、松貞はKがわざと松貞に聞かせる為に弾くのだという事を

知っていた。細い声で「このまま別れて」などと唄いながら弾き始めると松貞はよく仕事の手を止めてうっとり聞きほれた。まれに顔を見るKだったけれど、その音は松貞にのみ感じさせる「何物」かを伝えているように思われてならなかった。彼女は、今朝鐘をついている時にわざと墓詣りに来て、笑って行ったKの黒く澄んだ瞳を思出した。しかし、自分の真青にそった頭を考えると、激しい、どうにもならない失望を感じるのだった。どうかすると厭わしくて堪らない尼寺の生活に反逆を企てたところで、自分の円い頭が許さないとよくよく観念していた筈だった。しかし、ともすると隣に住んでいるKは松貞に、身動きのならない、強い縄を松貞の心の上から掛けようとするのだ。……

「男の人の前で赤い顔する様じゃとてもお仕えは出来ません……」庵主は口を歪めてこんなうわ言を言う之又すやすや眠ってしまった。彼女は顔の赤くなったのを覚えた。それは平生、口癖の様に言われていた事だったから。ヴァイオリンの音は未だ止まなかった。彼女はいらいらして来た目先へ幻の様に浮んで来るKの顔を打ちのめしてやりたく思った。思わず覗き込んだ庵主の顔に今更の様に死の影の漂っているのを感じた。

桐の花

「お道、お道——」背戸の桐の木の下で、純吉は家の中を覗きながら妹を呼んだ。すんなりした枝を張った桐の梢が微に揺れて、甘い夢の様な桐の花の香が、夕暮らしい空気の中に漂って来た。純吉は蒼い顔をして目ばかり動かしながら梢を見上げた。紫の、はっきりした、魂の様な花が青空へひろがって絞り染の様に咲いていた。彼は淋しかった。「お道」未だ返事がなかった。握っていた鉄の柄を二三度振って見た。がわがわと小さな声で、今耕したばかりの濁った水田の中で蛙がなき始めた。彼はひょっと振り返った。濁った水面が薄い夕映でぎらぎら光っていた。

彼は背を縮めて、家の中を覗いて見た。「お道何しているんだ」彼は声を励まして呼んでみたが、ガランとした家の中の黒く煤けた壁に、彼の大きな声が、グワッとそのまま反響して来た、「まあ兄さん、何をどなるの」きいきいした妹の声が茶の間の方から聞えた。気の弱い純吉はもうその上妹を呼ぶ勇気がなかった。彼は自分のどなった声の、消えて行った反響に、いつまでも耳を澄して涙ぐんでゐるのだった。

彼は、親もない、肉身といつては唯一人の妹に対しても、

本当に弱い兄だった。「又手紙書いてるな」彼はチェツと口を鳴らした。妹の後をつきまといっている中学生を彼女が愛しているらしい事を彼はこの頃知った。そして、彼は、自分一人の胸でそれを、淋しい事とも悲しい事とも思い悶えていた。彼は衝動的に鉄の先で桐の木を打った。紫の、熟し切った様な桐の花がばらばら落ちて来た。その一つは彼の肩へ止った。彼はそれを取上げて、眼を細くしながらかいで見た。

夜の七時頃、妹はフラリと何処かへ出て行った。電燈を見つめて考えていた彼も、あてもなく外へ出て見た。星の多い空が紺色に水田へうつっていた。蛙はないていなかった。桐の花の香いは、やっぱり甘く漂っていた。彼はすすり泣きたかった。翌朝、桐の木の下へ散っていた花が、めちゃめちゃに踏みにじられている事を、彼は発見した。直覚的に、ゆうべ妹がここで男と話していたなと思った彼は踏まれた花の一輪を拾い上げてかいでみた。しかし、香はなかった。彼は桐の木の下足の跡を、犬のように調べた。

朝飯の支度をしている妹の小さな唱歌が聞えて来た。しつとりした、桐の花の香の漂っている空気の中で、蛙が澄んだ声でなっていた。彼はふるえる程強い愛着を妹に対して覚えた。桐の花が一輪、ひらひらと落ちて来た。

気持のよい学校

東京から、大分はなれた田舎に小さい小学校がありました。それは、大変古い建物で、窓はみんな障子、天井は煤けているのですが、それでいて、気持のよい学校なのです。なぜなら一たん外を見ると遠くに上品な富士山が長い裾を引いているし、近くの山はしんと静かで、かわいらしく首をかしげた鈴蘭の花が、土も見えない程に咲き乱れ、一年中、鶯の鳴き声がしているような景色だからです。そればかりではありません。たった六人の先生は筒袖に袴、生徒は着物に前掛というように質素で、小使さんは、短歌がうまく、短歌の方では、この六人の先生の先生である位なんです。この小使さんは、毎朝教室に炭をくばって廻るのですが、その時には必ず黒板にその日にできた一首の歌をかきのこして行きます。朝授業がはじまるときには、先生も生徒も「さて、きょうは、小使さんがどんな歌をかいっていったかな」と思って、それをよむのがたのしみの一つになっている位なんです。

こういう感じのよい小学校の生徒たちは働きもので、毎朝学校へ来る前に炭をとって町へ運んで行ったり、田圃の水を浚べたり冬は雪を掻いたりします。そのために時々遅

刻することもあります。先生はみんなよい方ばかりですが、遅刻だけは嫌いです。それは、一人のために皆が落付かない思いをするからです。

ある時にも、正吉さんという五年生の子が停車場まで兄さんの車を押して行って、遅刻しました。

「こんどからはもう少し早く起きて行きなさいよ。よし」
先生は正吉さんのいいわけをきいてからそう言うて席へ入るのを許しました。正吉さんは、

「あしたは、おとなりの自転車をかりて車にのせて行つて、かえりには駅から自転車であつて来よう」と考えて、授業をすませました。そして、翌朝はそのとおりにしました。

正吉さんは、町をはずれるまでいろいろな店を覗き込んで「未だ三十分もある」「まだ二十五分もある。大丈夫」そんなことを考えながら自転車を走らせてかえつて来ました。ところが、村へ入る前の小川に馬が藁をつけたまま落ちて、それをたすけるのを大ぜいが見物しているんです。正吉さんも「五分だけ見ても大丈夫だ」と考えて自転車からおりました。そしてその「五分」がまた遅刻のもとになってしまったんです。正吉さんは、大変きまりの悪い思いはしましたが、正直に訳を言いました。そうしたら先生が赤い顔になって、

「君一人のために、みんながこうして、むだな時間をつかっているんだよ」と言い、だんだんこわい言葉つきになつて行きました。この先生は、やさしい時には大変やさしい

けれども、叱る時には大変こわい先生でもあるんです。先生は、粗末な大きい角火鉢のそばへ椅子を持って行き、いろいろなと叱る言葉をいいました。正吉さんはとうとう泣きながらひよつと見ると、こわいお顔をした先生の椅の裾が火鉢の灰の中へ落ちています。正吉さんは泣声の間に「先生椅が汚れます」と言いました。

先生は「ええ？」とききかえしましたが、意味がわかると一緒に「あははは」と笑い出して、裾をのけ、「君はどこまでも正直な人間だ」と言い、席につかしてくれました。

冷たい笑

せめての私の願は、鏡を見ることだった。

鉄格子の外には、疲れ切った緑に、うす茶色の曇の掛った秋の気配が訪れては来ていたが、日毎に照る陽のかげは銀色に眩しく光って、高いボブラの葉裏を、ばらばらと照りかえさせるばかりであった。みしみしときしむ食膳の箱を踏み台にして、いかに私が、その鉄格子の外の窓硝子に顔をうつそうとしても、青い空を背景にした明い外景は、埃に曇ったその硝子のおもてから、私の顔を弾き返してしまつたのであった。

夜は夜で、その硝子窓の外には深いにぎり江の様な黒い闇が深くたちこめた。何かの拍子に、ひょっとと見るその硝子の中の自分の顔は、見知らない恐しい女の顔であった。落ち込んだ目は手裏剣の様に怪しく輝き、油気の絶え切った額の後れ毛は、唐もろこしのひげの様に疲れて、ぼうぼうと縮んで垂れていた。夜の硝子にうつる顔が自分の顔であるとは、若い私には堪らない事であった。

染色のむらな柏餅布団に包まれてねてからにも、私は、何度か何度か、その硝子の自分の顔の幻影に、脅かされて、瀕死の病人の様なひ弱な浅い眠りからさめた。

空気の動かない、暗い室の中に端座したまま、私の聴覚は、日毎にとぎすまされて行つた。

きいきいとした、金属音の、肥った女看守の声は、髪の毛でもまつわりついた様に、一日中私の神経を揺つた、彼女がコンクリートの廊下を歩んで来る草履の音は、ビリビリと私の頭にこたえた。

男の看守のサーベルの音、監獄の警備にあたっている兵士たちの靴の音、どやどやした笑い声、ついに、私は発狂してしまふのではないかとささ考えた。

肥った看守は、チョビ髭の四十面を、脂でてらてら光らせた看守長と食付いているという評判だった。

姿はついに一度も見なかったけれど、朝夕の挨拶などを交わして親しくした隣の雑房の若い女は、看守長の笑い声が聞えるたびに甲高い声で歌などをうたい出してどなられた。

肥った女看守が宿直の晩には、必ず廊下の彼方の看守部屋にあたつて、看守長のみだらな笑声が聞えた。

高い天井と、冷え切った床とに反響して、きいきいした女看守の笑い声がそれにまじつて監房にひびいて来ると、囚人たちはいやが上にも静まり返つた。

そんなときに、甘い液体の中にでもひたっている様に、故郷の父母や友人の事などを次から次へと回想している私の心の中には、大きな波紋の様に押え切れない情熱が燃え上るのであった。

自由を剝ぎとられた人間、——私は、羽や手足をもぎとられて、畳の上にごろごろしている虫の姿を目に浮べてみる。

「不逞鮮人か、主義者か、未だ若い女じゃないか」

兵士らの濁った目が代る代る監視窓から覗き込み、彼等の視線のために、柱にもたれかかった私の横半身がだんだんに汚れて行く様な侮辱を感じながらも、自分で、自分の体を解放する自由をもたない。

しかし、自分でそれを嘆いてみる涙一滴すら、今の自分の肉体の中には貯えられていないのだ。

ある日の午後、激しい地震が古い木造建築の監獄を襲った。

各監房からは、絹を裂くような女等の悲鳴が聞え、戸外に駆け出す女看守達の慌しい草履の音が聞えた。

「これらが自分の人生の姿だ！」

私は腕を組んでふらふらと動きながら、黒い大きな錠前が、自分の居る檻の出口をかりとどじている事を考えた。「どうせ自由のない檻の中で死んで行く身の上だ」

私は死刑囚の気持を考えながら物凄くゆれる天井を見つめた。

冷たい笑が口許を走っていた。